

「誰もが自分らしく輝いて生きる」
そんな願いの詰まった歴史です

困っている方がおられる限り、制度を乗り越えてでも願いを叶えるのが私たちの使命。誰もが地域で輝いて生きてほしい。そのように願いながら取り組んできた社会福祉の歴史は、私たちの誇りです。

日本初の児童・成人一貫施設として「名張育成園児童寮」が親の願いで開設。



「成美寮(入所)」開所。地域企業に実習環境の提供を働きかけ就労支援の足掛かりとなりました。

障害者の地域移行、地域定着の流れが生まれ、県の先駆けとしてグループホーム「上野大栄ホーム」を開設。

自宅での介助を支援してほしい、障害者等ホームヘルプサービス事業に取り組む名張市が国の制度に先駆けて取り組んだ在宅サービスを2000年同市より受託。

国の制度にない入居者数の必要性を県に要請し、生活ホーム「すみれ」ホームの運営を開始(名張市桔梗が丘)。

上野市(当時)にも事務所を開設し、多様化した在宅での要望にいち早く応えました。

待機児童解消や子育て支援に向けて、保育園事業開始。東部保育園を名張市より移管。

地域の高齢者介護への要望に応え、高齢者の地域福祉ニーズに対応するため、4月に認知症対応型高齢者グループホーム「ひかり」を、特別養護老人ホーム「グランツァ」を7月に相次いで開設。迎える高齢化社会への取り組みも積極的に行っています。

1958
昭和33年

1961
昭和36年

1979
昭和54年

1980
昭和55年

1991
平成3年

1995
平成7年

2000
平成12年

2002
平成14年

2003
平成15年

2004
平成16年

2010
平成22年

2017
平成29年



多くの人に生きがいをと、「知的障害者更生施設成峯寮(入所)」を開設。



入所するのではなく、家から通いたいという願いに応え、「成美寮」に「通所部」を併設。

法人名を「社会福祉法人名張育成会」に変更。



市の要望により精神障害者の日中活動場所を設置。委託事業として小規模作業所「丸之内レインボークラブ」開設。同時に、精神障害者ホームヘルプサービスの運営開始。

精神障害者の地域への理解と社会復帰を支援する必要性を感じ精神障害者授産施設「レインボークラブ」、地域生活支援センター「ひびき」を開設。



みんな元気に「輝いて生きる」。それが私達の願いです。



vol.83 2018.11.1発行

発行:社会福祉法人名張育成会 広報委員会
〒518-0615 名張市美旗中村2326
TEL 0595-65-0271 FAX 0595-65-2936
発行責任者:市川知恵子
編集責任者:宮田義則
編集長:佐伯典昭(株式会社サンエイ)
編集デザイン主任:新井知子(株式会社サンエイ)
題字:千秋育子



Information
ウインターイルミネーションイベント
開催日:11月25日(日) 15:30~18:30

天に願いが届くようにと願いを託したウインターイルミネーションイベントは、名張育成会が行うビッグイベントの一つ。当日は様々なイベントやゲーム、また模擬店などもいっぱいあって会場は大いににぎわいます。是非お越しください。

お問い合わせ:0595-65-0271
イベント実行委員会

創立60周年。これまでにご支援、ご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

「先駆性」というDNA。

私たちはその遺伝子を受け継ぎ、道なき道を開いてまいります。

法律や制度がなかった時代に、「道を開く」という強い思いで作られた名張育成園児童寮が私たちの起源。その後の名張育成会の歴史は、「先駆性」の歩みでもあります。その中から、あまり語られていないエピソードをいくつか紹介します。

社会福祉法人名張育成会の起源となる「名張育成園児童寮」は昭和33年、「社団法人全国精神薄弱者育成会(現・社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会)」の全国にいる保護者たちの切なる願いとして、まだ法制度化されていなかった18歳以上の自立支援も行う児童・成人一貫施設を、既成事実をもって必要性を国に訴えようと、紆余曲

折の末に開設しました。18歳以上は国の援助がなかったにも関わらず、全国から自立支援を望む方が集まり、その強い思いは法律整備の動きを促進させることになりました。その甲斐あって2年後に「精神薄弱者福祉法」が制定、念願であった成人への自立支援の道を切り開くことになったのです。



昭和61年3月、成峯寮となった旧児童寮園舎前での集合写真。この建物は、平成13年3月移転増改築するまで、「先駆性」の象徴として育成園の歴史とともに歩み続けてきました。(写真提供:グループホームくおーれ 村田孝さん)

平成に入ると、日本でも「自立とは何だろうか」ということが問われ始めました。自分で選んだ生活を、サポートを受けながら過ごしていく。そのためにどんなサポートが必要か考え方を変えなければならなかった時、平成12年に地域移行先進国のアメリカを視察した上村前理事長は、即座に「よし、入所施設から地域に送り出していこう!」と、国の制度も十分でない時代にグループホームの整備に乗り出し、それが今の礎になっています。

私たちは「先駆性」をDNAとして、様々な社会福祉ニーズに取り組んできました。この遺伝子を受け継ぎ、道なき道を開いていく、制度がなくてもニーズに果敢に向き合っていく、そういうことを目指して、地域とともに歩んでいきたいと思ひます。

(8月24日、サマーキャンプin名張育成会2018講演より抜粋)

また当時の法律によって、重度の児童入所施設にはフェンスが巡らされていました。しかし子どもが育って行く中で発達障害が阻害され、ますます世間から遠ざかるとして、当時の先輩方は大論争の末フェンスを取り払うことにしたそうです。ノーマライゼーション(1960年代に北欧諸国から始まった社会福祉をめぐる社会理念の一つ)という考え方がまだ日本に定着していない時代に、障害の重い人も軽い人も一緒に暮らす、育ちあおうという共生の理念が、驚くべきことに当時の現場で生まれていたのです。



これからの時代を担う新入職員たち。(サマーキャンプin名張育成会2018にて)

先駆性への思い、ひとつずつ！

(※1)グループホームくおーれ 村田孝さん提供 (※2)ワークプレイス葉 福川佳代さん提供

通所更生施設の立ち上げ

原田 明政さん(昭和63年入職・現ゆーゆ所長)

私が成美の通所部の主任になった時は全国的にまだ、通所型の更生施設は普及していない時代で、やっと東京や神奈川県を中心に開設されはじめていた頃でした。

成美の通所部は5～6人の在宅の利用者さんからスタートし、日中プログラムの作業を入所者と一緒に行なうという運営形態でした。

今日では、日中活動の場と寝食をする住居を分ける職住分離の考え方は普通になっていますが、当時はまだまだ浸透しておらず、法人内でも通所部を独立した施設として整備をすることになかなか理解を得られず、ずいぶん議論しました。しかし、働きたくても働けない人たちが家から通ってアクティブに活動する場を作るために、通所型の事業所の独立を目指しました。

今日では福祉施設の種類や利用方法も多様化し、在宅支援サービスも充実してきました。しかしまだまだ、本当にサービスが必要な人に必要なだけ届いているかと言うと十分ではないと思っています。制度を越えて、地域住民の多様なニーズに対応する福祉サービスを、横断的、一元的、総合的に提供し、地域と一体化する福祉施設の在り方を問いつづけるところに、社会福祉法人にしかできない役割があると感じています。



昭和63年9月、入職直後に行ったぶどう狩り。(※1)



食が大切という考え方

中野 厚子さん(昭和53年入職・現食事課課長)

栄養士として入職したのは40年前20歳の時。最初の20年は、厨房にも入り調理もしていました。現場を知っていたことは、後々の仕事に活かされたと感じます。

遠足や行事の時は、朝早くからみんなのお弁当作りをしたり、年末年始は帰省をしない14～15名の利用者さんとおせちづくりや紅白を見たりと楽しかったです。

他にも手作りで肉まんや五平餅やみたらし団子作りなど思い出は尽きません。

名張育成会はずっと「食はとても大切」との考えから、専門職(栄養士)を置いて、様々な新システムを早くから導入してきました。クックチル(調理後すぐに急速冷凍し、食事の時に再加熱するシステム)に必要なプラストチャーなどの導入も早く、現在各グループホームに同じ品質の食事を届けられています。また、検査庫も早くから導入されました。各厨房に完備されており、検査分が2週間必ず冷凍状態で保管されます。以前、食中毒の疑いがあった時にもすぐに検査庫から保健所に提出できたおかげで、食中毒の疑いが晴れたことがありました。

現在は、利用者さんの幅が広がり、アレルギー食・えんげ困難(食べ物を上手に飲み込めない状態のこと。)な方の食事、常食、治療食と幅広く食事を提供しています。これまで培ったものや、導入されたシステムがあることで、個別対応に力を注ぐことができ、栄養士として喜びを感じています。



昭和63年3月に撮影された成美寮の食事風景。(※1)

寄り添う支援へ

中居 千津さん(昭和60年入職・現ききょうの家所長)

現在の「さんさん」のところに成峯があり、今、成峯の建つ場所がグラウンドでした。グラウンドでは盆踊りや体育祭が毎年盛大に行われていたのですが、盆踊りで新入職員が全員仮装してやぐらの上で踊ったのが、今ではとても懐かしいです。利用者さんは、発表会で劇をしたり、畑で野菜を作って売りに出たりもしていました。大きなプールもあって利用者さんも職員も一緒に水着で入り、水浴びをしたりしました。今思うとのどかな時代でしたね。

さて、当時はまだ「措置」の時代。利用者さんに言うことを聞いてもらうというスタンスで、ずっとなんか違うなと感じていたのを、職員の意見によって「寄り添う支援」に変えていきました。また当時は5～6人ひと部屋の和室で、一人ひとりの押入れの下にお布団を入れるなどプライベートは二の次でしたが、雑魚寝から脱却しプライベートを確保するという考え方の変化から新しい建物ができました。これが今の成美になるのですが、真夏に手で運ぶ引っ越しは大変でした。

結局、利用者さんに教えられてこまできました。今でも、仕事の中で人間教育してもらっていると感じます。



昭和59年10月頃におこなった体育祭での仮装行列。(※1)

「指導」から「支援」へ

福川 佳代さん(昭和62年入職・現ワークプレイス葉主任)

入職当初、利用者さんは職員のことを「先生」と呼んでいました。「生活の場所で先生って変よね」と違和感を感じるようになり、「先生と呼ぶのはやめよう」とその頃の職員で声をあげていきました。当時三重県下でもまだ慣例に声を上げる施設はなく、園内でも賛否両論ありましたが、職員をさんづけで呼ぶように定着させていきました。今ではそれが全国的にもスタンダードになっています。

児童寮は今の個室とは違い、一部屋4～8人の大きな和室で暮らしていました。夜中にてんかん発作を起こす子や、トイレに行かずに排便してしまう子もいたので職員はその和室で一緒に寝ていました。一人ひとりの布団を転々とし順番に寝かしたりしたことも、懐かしい思い出です。

成人式には女子には振袖を借りてきて着付けてあげて一緒に式へ出たり、夏の盆踊りは職員が浴衣を持ち寄って子どもたちに着せてみんなで踊ったりもしました。

当時、児童寮の周りには有刺鉄線がありました。子どもたちの命を守るために必要なものですが、それでも「この子たちを檻の中に入れてたくない、外したいね」と言って外すことにしました。それも法人の大きな転換期でした。そうやって職員のかかわりが「指導」から「支援」に変わっていったように思います。



大きい和室当時の児童寮。職員も添い寝をして一緒に暮らした。(※2)

法人理念の思いにふれ

竹村 恵子さん(平成17年入職・現みはた虹の丘保育園園長、理念研修担当)

昨年4月に、私を含めて5人の職員に「法人の理念について、もっと職員の意識を統一しなくちゃね」と、現理事長よりお話をいただいたことがきっかけとなり、その言葉の意味一つひとつをその職員たちと必死になって勉強し考えてみました。

例えば、「人として」という「人」とは何か?。「自分らしく生きる」とは、どのように「生きる」また、「生活する」ことなのか?。「信頼される」という意味は「信じて頼りにされる」…頼りにされるためには何が必要か?、など。私自身、私たちの中で絶えず中心におきたい「理念」について、改めて一言一句を噛みしめてみると、その奥の深さに驚きの念を隠せませんでした。

職員も多くなり、また法人の活動領域も幅広くなった今、職員一人ひとりが法人理念を噛みしめる機会というのも少なくなっているのではないのでしょうか。この60周年を機に、メッセージの奥にあるもの、本当のメッセージは何かを想像し、名張育成会職員としてDNAとともに肌で感じ取ってほしいと願っています。理念を自分自身の糧として、どう支援に活かすかということ、これからも皆さんと一緒に議論し実践していきたいと思っています。



虹の会では随時会員募集しています。
支援を通じた仲間作り
一緒に活動しませんか!
名張育成会後援会・虹の会
0595-65-0271